第 12 回 JGN 全国大会2022白山手取川大会参加レポート

2022.11.20

川南　恵美子

2020年、2021年とコロナにより通常の形では開催できなかった全国大会。消毒や会場設営等、また感染防止のための様々な工夫をしていただき、開催が叶った大会でした。ご苦労がしのばれます。関係者の皆様に感謝しております。

開会式のセレモニーでは地元の伝統芸能が披露されましたが、とても味のあるもので会場の雰囲気が一気になごやかになりました。かなりご高齢のお爺さん達が目で合図を送りあいながら、方言で唄われるのですが、これまでの大会で小学生や中学生、婦人会などがステージに上がられるのとは一味もふた味も違った良さがありました。とかく「洗練されたもの」「見栄えのよいもの」「カッコよいもの」で開会式を飾ろう！と思いがちですが、違ったなあと。つくづくと感じた次第です。白山手取川ジオパークの広がるこの地域の素朴な魅力がこのステージできちんと伝えられたと感じました。

基調講演では「恐竜化石から過去、現在と未来の地球を考える」と題して国立科学博物館副館長の真鍋　真氏のお話を聞きました。「地球は化石を通して自叙伝を綴っているのだ」という言葉が印象的でした。

その後のパネルディスカッションでは、気象予報士、写真家、大学教授、外国人の大学教授などの方々が登壇され、それぞれの視点からのジオパークについて、また白山手取川地域についての様々なディスカッションを聞くことができました。

気象予報士の方は、この土地が水の恩恵を受けているのと同時に災害にもつながる水であること。光と影の両面を持つ水との付き合いを続けてきた土地柄であることが語られました。なるほど手取川は「暴れ川」とも呼ばれる流れを幾度も変えてきた川です。低地には水がつき、そのためお墓も少し小高くなった「島」につくられています。

かつては「旅行会社がいかに多くの人を集めるか」が課題だったが、今は多様な目的地へ多様な興味を持ち出かけていくスタイルへと変化していること。

ジオツーリズムは、土地の面白さ、秘密を知り、さらに訪ねて深く知りたいというリピーターを生む「その土地のファンになってもらう」ツーリズムなのである。

コロナという目に見えないものにおびやかされて生きる我々は、「生きている実感」をアウトドアで感じるという傾向にあるのではないか。トレッキング、登山、海、山、が好まれ、その体験が大切だと認識されている。

・・・などの事柄が語られていました。

分科会は、大多数の人があぶれてしまい、メイン会場でパネルディスカッションを聞いた人が多かったと聞きました。
私は無事分科会の第一希望に参加することができました。
「地質標本販売を考える～地質標本販売にはどんな問題があるの？～」に参加したのですが、私の感覚としては、国立公園などの「一切の持ち帰りは禁止」といったわかりやすいものを想像して参加しましたが、大きくはずれていました。
世界でおこっていることは、
・持続的ではない採掘、採集問題
・環境負荷問題
・労働問題
と関わりが深く、けして単一な視点からのみ語ることはできないとのことでした。
また、地質標本の考え方も大きく変遷を重ねてきており、保全第一、保全の方法の模索といった2004年の考え方から、2006年には「販売するなら本物ではなくレプリカの石にすべき」「あらゆる地質遺産の売買を禁止すべき」とシビアになっていき、年を追うごとにゆるい雰囲気から厳しいものに変わっていること。
そして2016年には「いかなる産地のものであろうと売買に関わってはならない」と毅然とした方針が示されるようになりました。
テーマ別にアポイ岳ジオパーク、秩父ジオパーク、山陰海岸ジオパーク、南紀熊野ジオパーク、桜島ジオパークの皆さんがそれぞれ「海外の事例」「国内の事例」「環境負荷問題」「児童労働人身売買問題」を深く掘りさげて発表されました。非常に考えさせられる問題であると認識をあらたにしました。

自主研修として、ホワイトロードを登り、川の源流を訪ねてみました。
手取川の河口から源流までを見ることで、この地域の全体像がよくわかり、コンパクトながら自然災害と隣り合わせのこの地域の特色を理解することができました。
ダム、科学館、巨岩、街並みなどをじっくりと見学。上面だけでない理解を得ることができました。
とりわけ、昭和9年の7月に起きた土砂災害の様子が紙芝居のような形で展示されていたのですが、これは圧巻でした。
日本という国は火山、地震の国であると常々言っているのですが、同時に短く急な河川の災害もまた甚大な被害をもたらす恐ろしいものです。
そうした災害の歴史ともジオパークやジオツーリズムは結びついて、日本ならではの「学び多き旅」となることも大切な役目なのだと痛感しました。